（ 様式D－２ ）
（ 別　　紙 ）

令和７年度　海外派遣研究員研究報告書〔研究実績〕

令和７年９月１２日

日本大学理事長　　殿
日 本 大 学 学 長　　殿

所　　属　　芸術学部（芸術研究所）
資格・氏名　　教授・鞍掛純一

令和７年度海外派遣研究員（短期Ｂ）の研究実績を，下記のとおり報告いたします。

記

１　区　　分　　短期Ｂ

２　研 究 課 題

台湾における芸術祭の現状と日本における芸術祭との比較に関する研究

３　派 遣 期 間　　西暦 2025 年 8 月 5 日　～　2025 年 9 月 5 日

４　派　遣　先　　中華民国（台湾）

５　研 究 目 的

本研究では、日本で行われている芸術祭の特徴である地域活性化の特徴を台湾での芸術祭の特徴と比較する。特に日本における大地の芸術祭や瀬戸内芸術祭との共通項や相違点など、現地での実地調査を行う。

台湾各地域における美術館・博物館、再利用型文化拠点、芸術祭などの運営状況を把握するとともに、地域創生や原住民文化の継承・発信の事例を収集することを目的とし、さらに潮州での現地住民とのディスカッションや台東・池上地区の地域創生事例に関する運営スタッフへのヒアリングを行い、台湾における文化・芸術振興の多様なモデルを明らかにする。

６　研 究 概 要

過疎化地域における文化活動の持続可能性の検証と芸術祭や文化施設が地域振興に果たす役割の整理、東アジアにおける地域文化政策や芸術祭の展開への示唆。

① 研究の方法

台湾各地域における代表的な美術館・博物館、工場跡の再利用を軸とした文化発信拠点、および芸術祭を訪問・調査した。潮州では、現地住民との公開トークおよび討議を実施した。さらに台東・池上地区においては地域創生の事例を中心に、行

政・運営スタッフ・地元事業者へのヒアリングを通じて、農業資源・地域文化・観光を統合した実践的な取り組みの特徴と課題を整理した。

② 渡航先での活動内容

調査対象
・都市型文化拠点：台北、台中、高雄の公立・民間美術館、創意園区
・歴史・産業遺産活用拠点：台中、台南・高雄の工場跡地や文創園区
・原住民文化・地域創生型：潮州の部落、台東・池上地区の地域芸術館・工房
・芸術祭：緑島人権芸術季など、地域振興と文化発信を目的としたイベント

台北　美術館・博物館

故宮博物院　台湾原住民博物館　国立台湾博物館
富邦美術館、台北現代美術館　台北市立美術館　新北市美術館

文化・創意拠点・書店

華山 1914 文化創意園区（旧酒造工場）
田園城市生活風格書店（アートブック＋展示空間）
松山文創園区（旧煙草工場）

音楽・舞台

国家音楽ホール

自然・観光資源

野柳地質公園（ジオパーク）

台中　美術館・博物館

国立台湾美術館　国家漫画博物館（旧台中刑務所官舎郡を活用）
勤美術館

舞台芸術

台中国家歌劇院

再利用型文化拠点・文学

審計 368 新創聚落（旧宿舎群の文化創意拠点）
台中文学館　文化部文化資産園区（旧台中酒造）
中央書局書店（戦前創業の老舗書店　リノベ再生）文化拠点・舞台美術

（ 様式D－２ ）

台南　美術館・博物館

台南文学館　台南市美術館　台南市立博物館　奇美博物館

文化拠点・舞台美術

十鼓仁徳創意文化園区（旧砂糖工場を文化園区化）
安平古堡（オランダ時代の史跡）

高雄　美術館・博物館

高雄市美術館　高雄市立博物館

文化拠点・舞台芸術

内惟芸術センター（旧鉄道宿舎群活用）
駁二アート特区（港湾倉庫群の再生）
大東文化芸術中心　衛武国家芸術文化中心

潮州　文化発信施設・原住民部落

台湾好基金（地域文化推進組織）
佳興部落（排湾族）　三地門部落（原住民文化の拠点）

台東　文化発信施設ほか

池上穀倉芸術館
池上郷文化芸術協会
台東美術館
北回歸線地標
八仙洞遺跡（原住民が台風を凌ぐために隠れていた洞窟）
台湾基督長老協会
石雨傘観景平台
三仙台路海歩橋
交通部観光署東部海岸国家風景区管理処停車場
江賢二芸術園区
水往上流遊憩区
多良地区　向陽薪木傳工房
木凋芸術村（建和社区射馬干部落）

（ 様式D－２ ）

緑島　芸術祭

2025 緑島人権芸術季（国際的現代アート＋人権テーマ）

７　研究結果・成果

台北は、国立・公立美術館を中心とした文化発信拠点が集積する都市であり、国内外に向けた文化ブランドの中核を担っている。まず故宮博物院は、中国文明の至宝を収蔵する世界的規模の博物館であり、台湾の国際化文化ブランドとして機能している。一般的には観光目的の来館が多いが、それゆえ多言語対応やデジタル展示も導入され、グローバルな客層に対応している。国立台湾博物館は台湾最古の博物館で、日本統治期に建設された建築自体が文化的価値を有する。一方で展示の更新頻度が低く、現代的な視覚表現への対応は十分ではない課題も見受けられた。台湾原住民博物館では 16 部族を中心に工芸・音楽。生活文化が体系的に展示されており、部族自身との協働による展示やワークショップも実施されている。文化保存と観光振興を両立させるモデルケースと言える。富邦美術館は民間資本の現代美術館であり、企業の CSR 活動と都市文化信仰のモデルケースである。国際的な企画展を招聘し、台湾における国際的なアートシーンの紹介を担っている。地域社会との結びつきというよりも国際展開に重点をおいている印象で若年層が多い印象である。台北市立美術館は台湾初の現代美術館で国際的な企画展と同時に台湾の現代美術の発展に牽引している。近年はアジアの現代美術交流や国際会議、シンポジウムを積極的に開催し、多様化も進んでいる。来館者も幅広い印象である。台北現代美術館は、旧小学校の校舎を再利用した美術館であり、地域密着型の文化発信拠点として知られる。若手アーティストや地域住民との協働事業が盛んで、地域性と国際性を併せ持つ持続可能な都市型美術館モデルと言える。スタッフも親切でホスピタリティが高い。新北市美術館は 2024 年に開館した新しい美術館で、新北市の芸術振興の象徴的存在である。駅から直接アクセスできるので新興都市の文化施設としては再開発や観光振興として成り立ちやすい。敷地内には大きな彫刻が設置されており、設置も続いている。続いて旧工場跡地を文化拠点として華山 1914 文化創意園区、松山文創園区が挙げられるが、どちらも建物を上手に生かしながら、展示、デザイン、カフェ、イベントが混在している。都市文化の発信地として機能しているが、どちらも商業的な観光地としての色合いが強く、文化施設というよりは商業施設に近くコンセプトが曖昧とも取れる。国家音楽ホールは、台湾を代表する音楽ホールであり、クラッシック音楽を中心に公演が行われている。多様性を生むというよりも厳かな印象で基幹的な役割を果たしている。野柳地質公園は、新北市の海岸に位置する地質公園で、自然環境を観光資源化したものである。奇岩群は台湾の自然イメージとしてアピールされていて、確かに美しいが今後は保護と観光振興の両立が必要である。自然を文化的資源と位置付ける意味では重要な事例である。

台中では、公立美術館・博物館と民間創意拠点の両立が進んでいる。国立台湾美術館は、台湾最大の美術館として、近現代の美術が体系的に収集されている。広大な展

示スペースがあり、大規模な国際展や台湾美術に関する企画展を行っている。どちらかというと教育的な役割が大きく、コレクションの国際的な認知度が低いが、広大な敷地に野外彫刻の充実度は高い。勤美術館は、勤美グループが主導する建物で隈研吾の設計によるもの、高層ビルの敷地に庭と一体化した美術館として 2024 年に開館している。非常にコンパクトで、大規模な展示というよりも印象的な展示構成が求められる。台湾の印象というよりも都市開発にありがちな印象である。台中国家歌劇院は伊東豊雄の設計で斬新なデザインにより建物としても国際的な舞台施設として象徴的な存在である。台中にもリノベーション拠点がいくつか点在している。審計 368 新創聚落は宿舎群をリノベーションしたもので、飲食、雑貨、デザイン関連店舗が集まる観光スポットであるが、文化的要素と創業支援も兼ねており、入居店舗の更新などの持続性の確保が必要であるが、ユニークな拠点である。2 階からもお店に入れるなど階段や回廊が工夫されている。文化・経済の両方からの取り組みは地域創生としても面白い。旧酒造所をリノベーションし、展示やイベントを行っているのが文化部文化資産園区、広いので企画と観光、文化財保存のバランスが必要である。台中文学館は日本統治期の警察宿舎を利用、台湾文学の保存・普及を目的とした施設で文学と地域文化を根付かせる役割であるが、来館者は限定的である。中央書局は台湾初の近代書店として 1930 年に創業、近年復元・再開業したもので書店を文化遺産として位置付ける試みで、書店としての機能がありながら文化的持続性をもつユニークな存在である。

台南は、歴史や文学、現代美術を組み合わせた多岐にわたる文化都市の印象である。台南市美術館は、旧台南警察庁に増設した１号館と２号館からなる。１号館は台湾特有の大木を中心とした中庭を有し、古い建物を生かしながら、うまくリノベーションをしている。坂茂設計の２号館は 2019 年に開館した比較的新しい美術館で、現代美術の拠点として地域文化の定着が期待されている。台南文学館は、台南州庁舎を再利用した建物で建物としての魅力が高く、文化資産保存研究中心も同郷している。文学を都市文化に根付かせる役割として、地域文化振興の重要な資産と言える。台南博物館は、台南の歴史を展示する地域型博物館で、台南の歴史資源を体系的に学べる点で地域研究の拠点となっている。しかしながら規模はそれほど大きくない。奇美美術館は、奇美実業の創業者が設立し、西洋の美術、楽器、兵器、および動物標本など多岐にわたるコレクションを誇る。欧風の建物に広大な敷地に池もあり、家族連れやグループでの憩いの場としても機能している。民間資本によるコレクションとしてはかなりのものである。十鼓仁徳創意文化園区は、日本統治時代の精糖工場をリノベーションした複合文化施設。太鼓パフォーマンスの練習場も兼ねており、１日２回の公演がある。商業的要素が強いが、文化面も観光面も両立しており、古い工場にある機械類と同時にその内部を回廊させながら、ちょっとしたアトラクションもあり、持続可能な文化祭利用モデルとして注目されている。家族連れも多い。安平古堡は、1624 年にオランダ人によって築かれた台湾最古の要塞で、台南の観光資源としては、高い知名度を誇る。台南は産業遺産と民間資本を生かした文化発信が特色でバランス

が取れた文化発信が行われている。手書きによる映画ポスターが飾られる映画館も健在している。

高雄は、港湾都市の特性を活かした開発が行われている。高雄流行音楽中心や高雄港埠クルーズターミナル、高雄展覧館など、ベイエリアには特徴的な建築物が建ち並び、駁二アート特区のように港湾倉庫群をリノベーションし、現代アート、ストリートアート、クリエイティブ産業を展開する拠点としている。やはりどちらかというと商業ベースの観光地化は否めないが湾岸地区の特有なリノベーションであろう。また軍事用地を転用して建てられたホールの衛武国家芸術文化中心も、建築としての魅力が高く、象徴的な舞台芸術用コンサートホールである。さらにアートに特化した図書館と劇場の大東文化芸術中心も小学校跡地に建てられ、建築的にも象徴的でどちらもオランダと台湾の建築チームの合作である。どちらも建物が特徴的で地域のアイコンとなっている。また高雄からバスで３時間ほど南下した台湾最初の国家公園、墾丁では熱帯地域特有の植物と自然を堪能できる。途中古い城壁が残された恒春は移動の車窓のみ、墾丁国家森林遊楽区は、滞在時間が短かったため割愛した。

潮州は、原住民文化と新しい土地を開拓するために広東省潮州からきた住民が共存し、文化が入り混じっている地域である。ここでは、台湾好基金という地域文化の振興や教育支援、アーティストの後援を行っている文化財団の企画である「春潮集」というイベントの中で、今年 3 月に現地の住民 500 人ほどと一緒に制作した壁面の清掃と塗装を行い、トークイベントと同時に交流会を行った。財団は台北に事務所を構えるが、実際に企画運営しているのは、潮州と池上のみである。地域創生を中心に、地域住民との協力体制を強化し、持続可能な文化支援を目指している。トークイベントでは、これまでの制作や地域活動の紹介から、前回の制作における流れを説明し、アートにおける地域活動とその継続する意味などを意見交換した。また、排湾族の集落である佳興部落、三地門部落への訪問を行い、原住民文化の現在を調査した。佳興部落は、伝統的な工芸や祭祀を守りながら観光や体験プログラムを取り入れている。部族の原住民の伝統的な食事を振る舞われ、木工芸のアトリエでは、伝統的な工芸品の意味や後継者問題などの話を聞くことができた。三地門部落では、排湾族の著名な芸術家である伊誕 巴瓦瓦隆を紹介された。彼の作品は原郷の自然がモチーフとなっており、紋砌刻畫という表現方法を用いる。日本でも活動があることから今後も交流をもつことになった。いずれにしても観光化のリスクや若手後継者不足は課題であるが、地域主導の文化創生と観光の融合モデルとして評価できる。

台東は、今回の台湾滞在の一番のメインとも言える地域創生モデルがある池上地区を訪れた。この池上地区にも台湾好基金があるため、スタッフが同行してくれた。日本の原風景にも近い農村文化と芸術を結ぶ地域モデルが最も上手く行っている場所である。廃穀倉や地域工房を活用し、「池上穀倉芸術館」では展示空間として池上地区のアートの発信基地となっている。また古い家屋をリノベーションしたオシャレなカフェや雑貨屋も多い。水田の広がる風景には電線がなく、30km ほど続く「池上環郷自行車道」ではレンタサイク

ルで観光を楽しめる。また大地の芸術祭ほどではないが、収穫前の田んぼに舞台を設営しイベントが行われ、スタッフには地元の中学生などがボランティアで携わり、農家を中心とした地元住民も協力的だという。その理由としては、地元で会社を営む梁正賢氏がお米を買い上げ、生活を担保することで、観光と農業と芸術祭のイベントの企画運営のバランスがうまく行っている。またここで行われるダンスのワークショップなどは台湾各地から申し込みがあるとのことである。
台東美術館は、地方都市型の美術館で、地域作家の紹介に力を入れている。また多良地区における向陽薪傳木工房では、原住民の船を再生しながら、工芸制作やワークショップを通じて地域文化を発信、交流の場となっている。木凋芸術村は原住民が暮らす集落に形成された芸術村で、木彫文化を中心に展示、体験活動を行っている。日本との交流も多く、観光地化と商業リスクはあるものの、地域の主体的な活動により文化の継承が行われている。古い風習を継承する集会所なども修復しながら現在も使われている。台東地区は美しい自然が多く残され、北回歸線地標、八仙洞遺跡（原住民が台風を凌ぐために隠れていた洞窟)、台湾基督長老協会（小さいが非常に美しい)、石雨傘観景平台、 三仙台路海歩橋、交通部観光署東部海岸国家風景区管理処停車場、水往上流遊憩区などの観光スポットが海岸沿いに点在しており、見どころが満載である。中でも江賢二芸術園区は 3 月に開館したばかりで、江賢二の旧アトリエを拡張し、自然と芸術、建築が融合した施設である。自然との共鳴が重視され、建築デザインが作品の一部であり、アート作品と展示空間、自然の景観が一体化している。単なる観光地ではなく、台東という地方において国際的な芸術発信を行う新設拠点として、自然の中で芸術に触れるという意味では、池上地区との二つの異なる拠点があることは台東において非常に大きい。

緑島は、台東からフェリーで 50 分ほどの離島で、火山の噴火によってできた島であり、日本統治時代には火焼島と呼ばれ、元々は原住民であるアミ族が暮らしていた。国民党政権下の戒厳令時代、政治犯の隔離された流刑地として機能していた。「緑島人権芸術季」は、白色テロ期の政治犯収容所跡地を舞台に、人権と芸術を結びつけた国際芸術祭である。歴史的な記憶と芸術体験を融合させ、アートと観光、教育と人権啓発のテーマを融合させていた。

作品制作者として長年にわたり国内外の芸術祭に携わってきた経験から、各地の芸術祭が持つ意義や理念、さらには「サイトスペシフィック・アート」（特定の場所に存在するために制作された作品）に代表される現場における柔軟な制作方法と空間把握の重要性を改めて実感した。今後は台湾における文化発信、芸術祭の特徴を捉えながら研究活動に繋げていきたいと考える。

過去の事例として、2019 年台湾の最大規模の芸術祭「ロマンチック台三線芸術祭（浪漫台三線藝術季)」が開催された際にオープニング会場設営の一部を担い、複数の地域と作品を観る機会を得た。第 1 回目となる本展は、台湾の民族の一つ「客家人」の持つ文化に焦点が当てられ、会場は客家文化が点在する街道筋 150km を舞台としていた。一般的な観光地ではない里山の風景にも展開され、自然との共存による作品も多く観られた。作品の一部として使用される自然素材は現地調達可能なものが多く、

また各部族における生活に因んだものも含まれていた。このような台湾における文化の継承や掘り起こしは、日本における芸術祭の作品とは異なり、より多くの示唆が観られたと実感した。我が国との文化の違いやアイデンティティの継承をより求められている点が特色として挙げられる。また潮州で台湾好基金が主催の「春潮集」におけるワークショップ形式の作品制作も今回の調査と結びついた重要な経験となった。

台湾各地の美術館や博物館、文化関連施設を訪れるなかで、道中に触れた自然や人々との交流が、今後の継続的な関わりへと発展する可能性を秘めている点も大きな成果である。建物のリノベーションに関しては日本との基準や考え方に違いがあるものの、古い建築を積極的に活用する事例が数多く見られ、大いに関心を引かれた。また、多くの施設が商業施設と文化発信施設と共存しており、企画と運営の工夫が継続性とつながる問題は共通していた。

今後は、異国が持つ芸術的な特色を理解し、それを芸術祭における実践的な活動や作品化、さらには理念として昇華させていく必要があると考える。アートと地域・文化との結びつきの多様性は、新たな視座を導き出す可能性を秘めている。特に、里山に展開され、地方創生の観点からも意義を持つ芸術祭の実践には、多くの可能性を見出すことができると考えられる。また、自国の歴史や民族、風習を継承しつつ、自身のアイデンティティを見つめ直すことは、これまでの自分と向き合い、新たな価値観を発見する契機となるだろう。アートが抱える課題を軽やかさと自由さと、文化の継承がもつ重みとが交じり合うところに、現代のアーティストとの一つのあり方が存在すると考える。

以　上